



## 木と学ぼう

*Forest Nova with PLT/ERIC  
from 2012-2013*



**Project Learning Tree/  
ERIC 国際理解教育センター**

## PLT ショートプログラム 2013 年度 実践編

2012 年 8 月から始めた大学生のための「PLT ショートプログラム」。連続 6 回で、以下の内容を行いました。Forest Nova の学生たちは、年に二回ほどではありますが、小学生を相手にプログラム実践も行うそうです。これらの理解が役に立つとよいですね。

2013 年度は、実践力につながるように、「彼らがやる！」実践編を行なっています。

### 2012 年度

基礎編	第 1 回	2012.8.5	森の健康診断	PLT Focus on Forest より
	第 2 回	2012.10.7	環境教育の目標・内容・方法	EEM よりトビリシ宣言
	第 3 回	2012.11.4	あなたの子どもに自然が足りない	それぞれの木に必要なもの
	第 4 回	2012.12.2	幼児期からの環境体験	木に触れよう、ものの形
	第 5 回	2013.2.3	学びを点検する視点＝ガイドライン	なぜ、何を、どのように？

### 2013 年度

実践編	第 6 回	2013.3.3	実践計画を立てよう！	
	第 7 回	2013.5.5	まわりの音	<a href="http://ericweblog.exblog.jp/17747747/">http://ericweblog.exblog.jp/17747747/</a>
	第 8 回	2013.6.2		
	第 9 回	2013.7.7	相互依存	
	第 10 回	2013.9.1	地域のマップづくり	
	第 11 回	2013.10.6	構造とスケール	

以下は、PDF で入手可能です。

森の健康診断 <http://eric-net.org/news/ForestHealthCheck.pdf>

2012 年度の報告 <http://eric-net.org/news/PLTforForestNova2012.pdf>

実践編 第7回 2013.5.5 まわりの音

プログラムの流れ

1. 一人ひとり、1分ほど、耳を澄ませて、まわりの音を聞いてみる。
2. 紙を配る。今度は、「聞こえた音」を紙に描いてみる。5分程度。
3. 4人のグループになって、聞こえた音を共有する。話し合う。
4. 「聞こえた音」を分類してみる。

【介入のポイント】

- 「体験」「概念」「思考」の三点交差点でアクティビティを構想する。
- 共有する時のグループの人数は、4・5人程度に。
- グループでの話し合いの時の「思考の補助線」を提案する。ここでは「分類する」

【ふりかえり】

- グループ・サイズについては、すぐ対応してもらえた。理由も、実際の活動の姿を見て、納得が得られた。
- 「思考の補助線」は、提示されなかったもので、散漫な印象のあった3の後、「分類してみる」ことを、かたから提案。それについても、見ていて、参加者の集中力や、発見したことの質などによって、効果が了解れたように思う。
- 帰りの道すがら、すぐに応用が効きそうだと、感想をいってくれた参加者もいました。良かったね。
- 環境体験＝経験学習のスクランブル＝どんな体験に焦点を当てるか決める。その体験からの経験学習で発見して欲しい概念を考える。体験についてふりかえり、考えるための思考スキルを選ぶ。＝「体験」「概念」「思考」の三点交差点に、一つのアクティビティが浮き上がってくることを実感しました。
- ポイントは、一人ひとりの経験からの学びや気づきの質。分析的なものの見方・考え方の学習ではありません。しつこいようですが。

第9回 2013年7月7日

■相互依存

制作：望月亜佑子（麻布大3年）、吉崎香代（麻布大3年）、安達佑真（麻布大1年）

参考プログラム：木は動物のすみか

倒木

物品：ルーペ（あれば）、双眼鏡（あれば）、バインダー、紙

進め方

1. 3～5人のグループになって木や植物に、生き物の痕跡や生き物あるか探してもらおう  
（見つかりにくい場合は、生き物が利用していそうな場所、物を考えてもらう）（10分）
2. その利用は、植物にとってどんな影響を与えているのか、有害か有益かで考えてもらう（5分）
3. 各班の共有を行う（各班3分前後）（10分）
4. まとめを行う（5分）

**導入**

動物や植物には生きていくために必要なものを得る場所、生息地があります。一本の木が、動植物の生息地の一部であったり、生息地の全てであるということもあります。

今回はグループで一本の木（立木、倒木どちらも可）もしくは一つの植物にどんな生き物の痕跡があるか、どんな生き物がいるかを見つけてもらいます。

その時、木のどこにどんな痕跡があったか、どんな生き物がいたかを（絵で）紙にかいてみてください。

（生き物の痕跡や生き物がみつきにくい場合は、生き物が利用していそうな場所、物を考えてもらう。）

**まとめ**

共に利益があって、ともに成長していく場合と、一方的な利益の場合で、むしろ一方にとってはマイナスとなる場合もあると思います。

しかし、有害なものでも、その対策のために進化したり、適応したりと、ある意味共存しています。

森の中にはいろんなかかわりがあって、そのかかわりが無いと成り立っていかないんだよーっていうのがなんとなく感じられればいいかな！と思っています。

## ■地域のマップづくり

2013年9月1日

参加者：フォレスト ノヴァ 6名  
(内1名ファシリテーター)

2 グループに別れて、地域のマップを書く。

シェア。

ふりかえり。

- 知らないことが多い。
- 経済的な関わりが少ない。
- 関わり方そのものが少ない。

## ■構造とスケール

2013年10月6日 実施

テーマ：構造とスケール

目的：山によって活用方法が異なること、山の活用方法について考えてもらう。

内容：

1、まず、3～4人1組のグループになってもらう。その際、参加者には山を管理する人(山主さん)になってもらい、その山主さんグループで一つの山を管理してもらう。この山は、全てのグループ共通で、嵐山のような管理されている山であるという前提で話を進めていく。参加者に、この森でビジネス(経済活動)をしてもらうように指示をする。

→森という場を自然ではなく、ビジネスの場として意識してもらう。

2、異なった構造を持つ山を3パターン用意し、ランダムに各グループ1つずつ選んでもらう。

山A：40年後の嵐山

生物が多様、100年生、スギ・ヒノキ、

山B：ドイツのシュヴァルツヴァルト地方の森

山C：荒廃した森(例)

3、その選んだ山がビジネス場として、何をすれば山を活用できるかを具体的に考えてもらう。(林業ができる、環境教育の場になる etc…)そして、そのビジネスが何を巻き込めるかも具体的に考えてもらう。

4、各グループで発表してもらおう。その際そう思った理由(なぜそのビジネスができると思ったか)も述べてもらおう。

#### 5、まとめ

異なる構造を持つ山でそれぞれできるビジネスを考えてもらった。山によって異なるスケールのビジネスが出た、ということは、構造が異なると、山の活用方法のスケールも変わっていくということに気づいてもらう。

■以下実際に行つての報告になります。

#### A チーム (磯崎、吉崎)

良い材が育っているので、ブランド材として売り込む。

乾燥の技術も上がっているので、原木市場として成り立つはず。

#### B チーム (望月、曾原、川崎)

牧草地に着目し牧場経営を行い、生産物を売って儲けを出す。

さらに、それらを含めた自然体験ツアーを行うことで、地域ぐるみのビジネスを行う。

#### C チーム (芦田、新井)

手入れが必要なので、林業家を雇い整備をすることから始める。

そこから、A チームと同じ状態まで立て直していく。

■これらの結果を踏まえての感想

#### A チーム

種類が違う森のことを考えることで、様々な考え方が出る。

しかし、意見を出すには事前情報がなく難しかった。

もっと自分たちの身近なところから考えさせると、より意見が出たかもしれない。

#### B チーム

当たり前なことしか思いつかなかつた。いつもやっていることの中から知識を引っ張ってきただけなので、もっと新しいアイデアが浮かんだらよりよい話し合いになつたと思う。

#### C チーム

まず、荒廃した森をどう立て直すかで頭がいっぱいになつてしまった。

ビジネスにつなげるまで進まなかつた。

■担当者の感想

まず、構造とスケールとは何かを考えるのでいっぱいになってしまった。

あえて、事前情報を出さないことで自由に意見が出ると思ったが、もうすこし範囲を絞るべきだったかもしれない。

今回のプログラムでは自分たちが構造とスケールについて考えるよい機会だった。

■全体を通して

初めに、「ビジネス」をどう計画していくかという内容が、学生にとっては難問であった。森の活用方法は普段も考えているが、金銭の流れを考えるのは滅多にないことなので、そういった意味では刺激があったかもしれない。

また、全く別種の森を考えさせることは、比較はしやすいが、どこが違うのかが気づきにくかったように思われる。特に AC と B の森は全く別種のものに感じられた。

C チームはその部分が考えやすかったと答え、B チームは難しかったと答えていた。

全体を通して、意見交換は活発に行われたので、担当者含め、今後構造とスケールを考えていくのにいいキッカケになったと思われる。